

特241

910

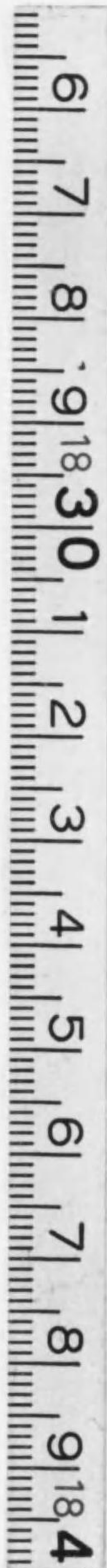
清水組と

清水釘吉氏の白彊術

日統社編

(第二十二卷)

日統社刊行



始



特 241  
910



日  
統  
社  
編

清  
水  
組  
と

清  
水  
釘  
吉  
氏  
と  
自  
彊  
術

日  
統  
社  
刊  
行



## 「日統社」趣意

金匱無缺の國體を誇る日本國民にして、行住座臥、凡そ日本を考へ、眞に日本を憂へ、日本を念ずる方は、現在の我日本の趨勢が餘りに甚だしく、國民の理想と信念とに反逆することを痛感なさるであらう。是れは新たなる日本更生の陣痛であり、過渡期であるからだと思ひます。

此の秋に際して我國民はたゞ徒らに悲憤するのみでなく、國民一致協力して皇國日本の理想實現に精進しなければなりません。日統社の事業は斯うした時代に對して、國民精神緊張の喚起であり、現代青年の進路に對しての大道を輝す案内であると確信して居ます。

即ち偉人、名士、成功者、は之れを歴史と云ふ時間的立場から眺めると、そこにある時代に卓越した人物であり、社會と云ふ空間的な立場から見渡すと、ある社會に於て斷然頭角を現した人物であります。

尤も人間である以上は、之れを縦横に觀察する時には短所弱點もあり、完全無缺なりとは言へぬであります。然しよく個々に觀察すればそこに何人にも到底比較の出来ない絶對な特徴、長

所があるのであります。

ある人は、この優劣は先天的だと言ふ、又優生學上から決定しやうとする、或は運命なりと言ふ人もある、然し是等は一面の眞理であるかも知れぬが、全幅ではないと思ひます。即ち、人間の努力修養が必然的に此等の人々の域に到達し得る事實があるからであります。

努力修養は理論でなく實行であり、體驗に依つて得られるところのものであります。故に本社の名士、成功者の傳記、人物評論、逸話は現代青年にとつて最も良き實踐躬行の參考書なりと深く確信致します。庶幾くば奮つて本會に御加入下され、共に俱に不斷の修養に努力し、堅實な國家發展を目指して邁進致したいと存じます。

## 日統社

主、幸中村 一  
編輯長 栗原俊穂  
速記者 山田錠太郎  
社員 一同

## 目次

近代都市建築美	一
清水組の沿革	四
清水組の現在	六
清水釘吉氏を語る	九
率先躬行の人	一〇
趣味と人格的一面	一二
清水氏と自彊術	一四
その體驗から	一七
實演體操とその治術	二〇
自彊術學院	二一

細心なるその實行要領の注意	二五
健康體判斷法	二八
目的効力	三一
學院長清水釘吉氏	三二
清水一雄氏を語る	三五
清水揚之助氏を語る	三六
三氏揃つての清水組の活躍	三九

## 清水組と

### 清水釘吉氏の自彊術

日 統 社 編

近代都市建築美

大正十二年九月一日、恐るべき自然の猛威、大震火災の爲に悲惨なる状態に打ち碎かれたこの帝都の復興に、又恐るべき人工の偉大さを見せて、僅か七八年の短時日の間に、驚くべき成果を見せ全く面目を一新した帝都建築の美觀を現出せしめた。

すでに復興事業成り、更に大東京市制が敷かれ、世界第二の大都市を誇る、昭和七年今日の帝都の美觀は、楯比する洋式建築と、疾走する交通機關と、飛揚する廣告氣球に代表されてゐるの觀

がある。

昔戀しい、と唄はれる銀座から日本橋、京橋、新橋附近、東京驛頭丸の内のビルディング街から上野、浅草、神田、神樂坂、新宿に至る各所に、洋装建築が、其の特異なる意匠、姿を競ひ、美を争ふ様は、實に世界第二を誇る都市建築として、實に相應しい眺と言はなければならぬ。

尙是等に配するに、或は地下鐵に、高架線に、橋梁に、その建築美は、更に立體的に擴がる交通路に飾られて、空に浮ぶ廣告塔、廣告氣球に飾られて、近代都市美を遺憾なく發揮してゐる。

而して今なほ、道路鋪道の正整擴張、瓦斯水道の普及延長、店舗住宅の改造建築と、近代都市の觸手は、新編入各區を、完全に裝飾すべく、すばらしく伸展しつゝある。斯くて、大東京展望の美は、夜を輝やく、ネオンサインの光と共に、驚異に近い現出を吾人の眼前に展開した。

扱てかゝる都市實現のために、重大なる役割を果しつゝあるものは、言ふ迄もなく建築土木工事である、實に都市實現がこの建築土木に負ふところの多い事は何人も直ちに肯んするところである。

而して此の土木建築界の巨壁としての清水組の活動が、今日如何に目ざましいものであるか、すでに諸君の想像にも明なところで、今更喋々を要しないが、試みに數限りないそれら清水組の建築にかゝるものゝ中から代表的なものと思はれる一部分を、抜出して見れば、次の如きものが示される。

秩父宮殿下邸 東伏見宮家御本邸 新宿御苑内大葬場殿 内閣總理大臣官邸 内務省 東京會館 東京帝大安田講堂及工學部講堂 第一銀行本店 第一生命保險會社 白木屋本店 三越新宿分店 増上寺 富士瓦斯紡績會社 東洋モスリン會社 池上電鐵第三區土工 東武鐵道隅田川橋梁 日暮里荒川間高架線 東京地下鐵萬世橋、神田、今川橋間

等がある。勿論此等は東京本店の取扱にかゝるものであつて、大阪、京都、名古屋、其他の支店が、夫々扱つた重要建築の多い事も、言を要しない。

斯の如く、物質文化のため、絶大の功績を示す清水組の社長、清水釘吉氏が、清廉純情の人格者であり、のみならず、最近その體驗から、日本國民の精神と體育方面に偉大なる貢獻を成しつ

あることを知つた筆者は、尊敬措く能はず、廣く世に紹介し、吾人修養の龜鑑となし、國民理想實現への光明ともしたいと思ひ筆を執つた次第である。

是等氏の人格と、其の自強術に就いて細説することが、本文の主眼ではあるが、順序上清水組の歴史を述べ、次第に其等に及ぶこととする。

### 清水組の沿革

既に、幾多のものに、清水組の歴史は、幾度か掲載されてゐる事であり、此處では簡単に、現在社長清水釘吉氏に至る、その大綱を述べるに止める。

清水組の初代は清水喜助氏であり、今を離る百三十年前、即ち文化九年、當時の江戸に於て僅少なる資本にて建築業を開始したことに初まつてゐる。

同氏は越中の人、夙に江戸に出で、大工職に従事し、具さに辛酸をなめられたさうである。勤儉で篤實な性質の人で、孜々業務に奮闘した眞面目な建築業者であつた。

二代目喜助氏は實に識見非凡で、たま／＼維新の變動後、早くも時勢の趨く所を洞察し、明敏に、將來斯業の進路を察知し、横濱開港と共に同地に赴いて、洋風建築に研究従事した。そして當地にあつて、外人の工事を請負ひし腕を以つて、當時の築地に初めて木造ホテルを建て世人アツと言はせたさうである。是が實に吾が國洋風建築の嚆矢であつたのである。

更に氏は當時財界の新進であり、又重鎮として、我事業界に力を注いだ、故澁澤子爵の知遇を得た、この一事は、やがて清水組を其後一躍、洋風建築界の權威者として、世人に認めしむるに至つたものである。即ち、澁澤子爵關係の事業の工事を、總て請負つて、益々その信任を得た事が、今日の清水組の礎石を築いたのであると言つてもいい様である。

三代目主人は清水滿之助氏と言ひ、丹後の人、村田六郎左衛門氏の次男であり、養はれて清水家に入つた人である。専心養父の事業を補佐し、益々流行する洋式建築のため、日夜精勵、業務擴張につとめ、明治十九年には歐米各國を廻つて、學理と實際を研究し、歸國後、その蘊蓄を發揮して、着々とその實力を示し、本邦建築界洋式工事の泰斗として、名實共に赫々たるものがあ

つた、が惜しいことに病を得て遂に早逝されたのである。

六

四代清水滿之助が業を繼いだが、年僅に十才、而も病身であつた。明治十一年十月横濱で生れ幼時は喜三郎と稱した人である。若年であり病身であつたが、母梅子氏が實に賢明貞淑なので、良く孤を擁して遺業を攝管したのであつた。丁度此の時、姻戚であり敏腕家としての聞えあつた原林之助氏が、先代滿之助氏時代よりの支配人として、忠實業務を補翼し、故澁澤子爵が熱心に同家を扶護されたので、幸に此の危期に於ても、却つて業務益々發展したのであつた。

### 清水組の現在

明治四十二年、原氏他界して後は、代つて清水釘吉氏が、其の任に當り、凡てを主宰したのであつた。而して氏を助けるに義弟一雄氏、及揚之助氏の二氏があつた。現在の清水組はこの三氏の協力一致によつて降盛を示してゐるのである。是等三人は各々四代目滿之助氏の姉妹である三女のそれ／＼夫君であり、清水組が従來の個人經營から、合資會社制に改められて後はその無限

責任社員として、又釘吉氏がその社長として共に活躍を續けてゐるのである。

釘吉氏は京都の人、原姓小野氏、慶應三年の生れ、十三才の頃横濱に出で、先代滿之助氏に賴り其の穎悟を深く愛せられて、同氏の庇護の下に、慶應義塾其他に學び、進んで工科大学に建築學を専攻し、明治廿四年同校を卒業、工學士となり、清水家に入つて長女たけ子氏と結婚、清水組技師として活躍を續けた。三十四年には視察の爲め歐米諸國を巡り、歸朝後益々努めて今日に至つてゐる。

又氏は一年志願兵として、日清日露の兩役に從軍し、累進して陸軍歩兵大尉に任ぜられ、功を以て従六位に敘せられ、勳五等旭日章を賜つてゐる。

一昨年、昭和五年に、四代滿之助氏が死亡されたに付ては、同氏三男保雄氏が、養子として本家清水家に入り、滿之助を襲名し、五代目清水滿之助として活躍されてゐる。同氏は早稻田大學政經を出、洋行された人である。

清水一雄氏は三代滿之助氏の次女、靜子氏の夫君である。岡山の出身で本姓を入江氏といひ、明

七



治八年二月生、同氏は第一高等學校より、東京帝國大學法科に入り、業を経て法學士となり、明治三十三年、清水家に入り、同家の柱石として、兄釘吉氏と協力し、清水組の畫策經營に當つてゐる。

清水揚之助氏は明治二十年生、慶應大學理財科を出た秀才であり、滿之助氏三女トク子氏の夫君である。共に義兄に力を併せ、その社交的方面を引受けて、その繁榮に盡力するところが多い。

大正四年十月、清水組は、從來清水滿之助名義の個人經營であつたものを、資本金三百萬圓の合資會社とし、前記清水工學士、清水法學士の二人を無限責任社員とし、工學士清水釘吉氏が社長として、益々事業の基礎鞏固を加へ、兄弟三人の各特徴を以て、互に一致協力して事に當り、その和親の機は實に美まれる程である。こゝに無限に著しい發展を示す理由があると云つて過言でない。現今は前記各地支店の外に、全國各地に支店及出張所を設け、益々その活動を續けてゐるのである。

### 清水釘吉氏を語る

かゝる大清水組を背負つて立つ社長、清水釘吉氏はいかなる人であらうか。氏の性格、その人となりに就て、筆者の見たところを忌憚なく述べて見たいと思ふ。

神田駿河臺の高臺、西園寺邸に向ひ合つて、氏の宏莊なる邸宅がある。廣々とした應接間には漆黒の大ピアノがすえられ、壁面の高雅な裝飾は、室の落付いたセットに調和して、主人主婦の好みを思はせる。窓ごしに、高々と聳ゆるニコライ聖堂の塔は紺碧の空に一きは美しく、朝と夕に七ツの鐘のかなでる、妙なるメロデーは、靜かに氏の邸の樹木の梢をゆるがせるかに思はれる。流石に建築を本業とする氏の邸宅は、意匠を凝らしたもので、街頭を行く人々の眼にも止まるどころであり、震災後町内で一番早く建築復興したのも、此の邸であると云ふ、由緒付の建築である。

今此の屋敷中に、家人の外に女中六名、書生、小使、執事各一人がゐる。

本年六十六才になつた氏は、然し乍ら壯者をもしのご元氣と朗らかさで、賢夫人たけ子氏と共に圓滿な日を送り、或は清水組事業を處理し、又信する自彊術の修業普及に努められてゐるのである。

### 率先躬行の人

氏は理論の人ではない。空論を排し着實なる實行を尊ぶの人である。かの大震災の爲め帝都は灰燼に歸し、社長の家も本社も共に勿論其の例に洩れず烏有に歸した當時、混亂の間に處して、幸に芝浦鐵工所が、この災害を免れたるに力を得、直ちに各社員を動員すると共に、大阪、名古屋其他の方面より、建築材料を蒐集し、之を芝浦より陸上げし、幾十臺のトラックにて、日夜東京横濱等の罹災地に廻し、諸官衙、學校銀行會社、橋梁、其他あらゆる建築土木、架設に、晝夜兼行の努力を爲して、復興に精進したのであるが。當時釘吉氏は自らゲートルに身を固め、現地へ赴き、共に之等の仕事を率先指揮し、何くれと支配したのであつた、かゝる氏の激勵あつて、

社員も力を得、當時の如き混亂状態にあつて、善くその活動を見、清水組の成績顯著なるものがあつたのである。

嘗て氏は、其の工科大学にあつた學生時代、第一銀行大阪支店建築のことあるや、學生の身を以て、選ばれて工事監督の重任に當り、率先その仕事の進行を計り、能く其の責任を全うして頗る斯界の注目を引いたと云ふ話もある。

この率先躬行は實に氏が軍隊教育を受けられたところに、益々根強く植付けられたものと思はれるが、實に之の一事は氏が教育者として相應はしい人格的一面であり、又社長として社員に對するに適當なる人格とも云い得る。即ち氏は社長として、常に人格的師表を以て臨み、社員に對する時々の訓話に於ても、常に自ら身を以て師表たる自信を以てし、人格向上完成に對して常に社員を戒められるさうであり、社員一同も亦氏が率先その師表たるの人格に深き感化を受け、尊敬するところ深甚なるものがある。

今日自彊術學院長としての氏は、毎朝自ら道場に出で自彊術を實演し、この率先躬行の感化に

より、家族全員は勿論、親戚一同に至るまで、之に習ひ、同院學生に影響を及ぼすその人格的教育は實に尊いものがある。

沈着にして果斷、實踐躬行は、實に氏が砲煙彈雨の下をくぐり、泰然自若として、事を行つたその經驗によつて、植付けられた、尊い氏の人格として、筆者も心から尊敬を覺えるものである。

### 趣味と人格的一面

清水釘吉氏は奢侈を好まざる地味な人ではあるが、それかと云つて非交際的な人ではない。一度氏に接する者はその人間味豊かな朗らかさに自らなる親しみを感ずるのである。對談の裡にも絶えず微笑を湛え、少しも氣障な所がない。老齡に達して、而も體質蒲柳にも拘はらず、若やかな健康體を思はしめてゐるのは、氏が熱心に實修する自彊術の賜物であらう。健康に意を用ふることは非常なもので、喫煙も飲酒も一切謹んで攝生を怠らないのである。思ふに氏の明朗なる性格は、その健康から生れ、健康は又自彊術と日常の攝生より來てゐるのであらう。健康そのものを

全く愛し楽しむといふのが、その心境であると云つてもよい。

又氏は社員に對して時々訓話するが世の所謂重役と云はれる人で、眞に社員間に心からなる尊敬を拂はれてゐるものが幾人あるだらうか、社員として社長を他に對して良く云ふは人情の常乍ら、社長清水氏が社員から親しまれてゐるのは、單なる人情以上のものがある。社員に道德的訓話をして、少しも身に恥じないだけの人格者であることは、社員等の口から實際に聞く所である。「自分は正しいが故に恐れず」と接近者に洩らすが如く、その身を持するに清廉を以てし、常に實踐躬行に努めてゐる。

氏は又高雅な趣味を有し、其自邸の庭園を造るに當つては夫人同伴にて京都一流の庭園を視察し、それ等の粹を集めて造つたもので、心ゆくまでその古典趣味を採り入れたものである。氏が京都出身なるを以てかゝる關西趣味を現はしたものと解するのは當つてゐない。造庭術に於ては日本に勝る國なく、日本に於ては關西京都に勝る庭園はない、氏が洋風建築の如き尖端的事業に従ひ乍ら、尙ほ古典美に對する注意を怠らざるは全く敬服の外はない。

尙非常に敬服すべき點は社會公共へ盡すの觀念に燃てゐる點である。例へば氏は震災前までは町内講話會の副會長として、又在郷軍人會長として一意専心その指導に盡瘁せられたのである。

### 清水氏と自彊術

近代的建築土木工事を以て、物質文化の爲に、偉大なる功績を残した氏は、更に精神文化の爲に大なる寄與をされつゝある。

思ふに西洋文化の移入、物質文化の進展は日本國民性に大なる變動を生ぜしめた。嚴然と存した國體觀念、情操的道德も一度歐米文化の襲來を受けるや、人心は忽ちその慧智と理論とに眩暈され、只管模倣、禮讚へと傾いて行つた。その結果、極端なる理論偏重と物質萬能に偏き、毅然として卓越した我が傳統的思想は全く没却さるゝに至つた、すでに國民理想の放棄となり、現實を謳歌し人間生活は悉く物質に依つて使役され、支配されるに至つた。

實になげかはしき憂慮すべき現象である、こゝに至つて國民精神の作興を叫ばれるに至つた

が、洛々として流れる世の大勢に、中々國民の自覺は見られない有様である。

此の間に處して、氏は夙に、この方面に着目し、精神方面への努力を初められてゐたのである氏は冷靜澄徹した識見の下に、あらゆる長所を採り、理想實現を目ざすと共に、物質文化の進展に伴ふ、精神文化併行の必要を痛感した、而して此の精神文化の健全なる發達は實に國民の健康生活にあると信じたのであつた。

此處に氏は社會的奉仕の意を決し自彊術學院を創設し、自ら院長として、教育の事に當り、社會救済、思想國難打開の大事業に直往邁進されるに至つた。

實に現時日本、殊に都市生活者の多くは不健康そのものの身心の所持者である、全く主智的になり、神經質的に偏より、圓満なる人間性は、日に月に影をひそめつゝある、輕薄なる思想、過激なる言動は益々日を追つて増加し。幾多の犯罪は都市を中心として渦巻き、而も益々機械に追はれ物質に左右され、失業者は群をなし、厭世自殺まで、その不健康状態は見るに堪へざるところであり、心ある者の憂慮置く能はぬところである。

其の結果は、次ぎ／＼に起る知名士暗殺事件となり銀行ギャングとなり帝都暗黒化の陰謀となる、小にしては世を騒がすバラ／＼事件となり、ピストル強盜の横行となる。

是等世の暗黒化は物質文化の所産であり、都市生活者の不健康なる、肉體、精神の缺陷から生ずるものが多い。此處に多大なる原因の存することを考へた氏は、健全なる精神、善良なる國民性を求むる手段としての國民生活の健康を目ざして、一意努力を初められたのである、實に今にして、國民保健の實を擧げるの要は、昭和日本の爲に缺くべからざる重大事である、丈夫な身體の保持者となり、健康な精神の保持者となり、あまねく物質に左右される事なく之を支配し得て明るく愉快なる生活を多數國民が持ち得てこそ、日本國民理想の實現も望まれもし極まりなき物質文化の發展も讚美され得るのである。

肉と靈、物質と精神は一體不離のものである、其の一方の偏跛なる發達を示すところに、憂慮すべき現象が起るのである。

斯くて氏は、今全力を擧げて、自彊術の普及、國民健康の實現に精進されつゝあるのである。

氏が事物の本質を掴み、その完全なる人格の表はるゝところ、やがてこの自彊術の普及への努力となつたのである。

氏は實に憂國の士であり、思想の惡化、失業の現象、犯罪の續出、是等現今の憂ふべき社會現象を救ふ、唯一根本的必要手段として、動かすべからざる信念の下に、この自彊術普及への努力を續けられてゐるのである。

何方かと言へば、名聲、名譽心を退け、華々しさを避け、宣傳を厭ふ、地味堅實人格的な氏が一度この自彊術に對しては、自ら自彊術道場を駿河臺に建て、自彊術學院を創設し、學院長として、世の爲に盡さんとの強き信念を持たれてゐるを見れば、如何に氏が思ひ徹した結果の努力であり、その信念の如何に深いものであるかを、十分感銘する事が出來やう。

### その體驗から

清水氏が自彊術を知つたのは、氏自身が胃腸病に苦しんだ體驗から來てゐる。あらゆる名醫と

良薬とに思ふがまゝに接し得た氏の病氣が、はか／＼しい効果を、その何れから見出し得なかつた際に、偶々探し求め聞き知り得たのがこの自彊術であり、その絶大なる偉效に驚異と感謝を覺えると共に、廣く世の人々をも救ふべく、社會的奉仕のため、その普及を初められたのである。

この自彊術は中井房五郎氏の創案にかゝるもので、其の特色は、日本人の創案に依り、日本人の見地に立脚した純日本式の體育法であり。大自然の理法に基き秩序整然として聯絡ある三十一變の全身運動であるところにある。

氏が、その和泉橋道場を訪ひ、この自彊術を實施し初めてより、氏の胃腸病はいつとなく消散し、健康は益々増進し、心身の爽快を致した、この動かすべからざる體驗は、強き氏の信念となり、己のみを思はず、あまねく社會國家を思ふ、愛國心と結合し、こゝに自彊學院の創設を見るに至つたのである。

氏が普通、世に見る資本家と異り、廣く社會を思ひ、世を思ふ實例としては、その増税に對する意見を擧ぐることが出来る。氏は増税に對し、資本家的に徒らに之を拒否し、非難することな

く、實に正當なる判斷を示し、日本國家前途のために、正しい論をなされてゐる。地理的に世界に偏在した日本の、長所短所を明確に指摘し、今後日本の進むべく、取るべき進路について細説するところ、實に氏の優れたる識見を見るのである、更に斯く日本國家を思ふ、日本主義の氏は其の精神方面所謂日本魂をも尊敬し、あらゆる思想に對し可成峻烈なる批判を下してゐるのである即ち堅實主義の人格者としての氏は、あまねくその長所を助長し短所を補ふと云ふ、折衷的な漸進主義をとるもので、皇國日本の美點として、道德的情操的思想の古來の美點を十分認めて居り、益々その美點發揚のため、健康を回復し、更に採長補短で進まうと云ふ、保守的消極的の中に積極、進取を含んだ完全なる理想論の中に氏の生々とした信念を見るのである。

かくてその自彊術に依つて現時憂ふべき社會現象、國民生活の不安を救済し、固有の精神を發揮し、健康なる肉體と共に、明るい日本の理想實現のため、氏は最善の努力を盡されつゝあるのである。

### 實演體操とその治術

こゝにその自彊術に就てやゝ詳しく述べて見ることにする、是も亦世のため有爲なる事と思ふが爲である。

この自彊術は創始者、中井房五郎氏が、香川縣に於ける、自然生活の體驗に依つて案出された健康體育法であり、早くより名士の間に普及し喧傳され、其の効顯を知られてゐたものである。是には治療法と實演法（體操）との兩様式があり、兩者相扶けて完全なる健康體育法を成すものである。

その自動方面即ち自ら體操する實演の自彊術は、今日既に廣く普及されて居り、その體育的効果や合理的組織は、各方面に賞讃されて居り、實行者も頗る多い現状である、が此の體操は、初め患者を待たせる間を合理的に指導するために行つた體操であつて、之は自彊術（治療）の言はば副産物なのであり、此の實演（體操）を産み出した母體が、實はその治療法なのである。

此の治療法は従來自彊術創始者の管理する道場に於てのみ實施され、全く門外不出の秘術として扱はれて居つたため、自彊術を實行し、又之を能く知る者さへ、其の眞意が奈邊にあるかを知らないものがあると言ふ状態なのである。

### 自彊術學院

初め中井房五郎氏は、和泉橋附近に道場を持ち、この治療法を行つてゐたのであるが、一度之を體驗した者は、皆口を極めてその効果の顯著なことを賞讃する有様で、治療を乞ふ者、日に／＼その數を増し、遂には前日より札の前賣りをして、その混雜を防ぐ有様であり、毎日治療を乞ふ者百名を越える有様であつた。

日を追つて益々その數を増し、遂に東兩國（兩國橋東詰）にその本部を移し（現在も同じ）可及的その求めに應じたのであるが、尙この本部のみにては應じ切れない状態を續けたのである。

この時引續き自彊術を修めつゝあつた清水氏は、前記の如き國家社會を思ふ心と、何か社會的

に奉仕したいと思ひつゝあつた矢先とて、この自彊術の普及について考へ、學校組織として多くの人を養成し、健全なる國民生活の一日も早き實現を目ざし、私財を投じて、昭和四年春、自彊術學院を起工し、其年七月十七日獻道式を舉行したのであつた。

翌年創始者中井房五郎氏は長逝されたが、引續き其子及甥の中井勝美氏が現在主任として東兩國本部に活躍を續けてゐるのである。

而して清水氏の創設にかゝる、自彊術學院は現在、體操練習生七八十名、生徒三十名、女五六名と云ふ成績を擧げつゝあるのである。

其の學則の中重要なものを抜けば、總則第一條に曰く

本學院は皇道を遵奉し、中井房五郎創始に係る自彊術を以て社會に奉仕するものを養成し自彊術の普及に依り國民體育の向上を期するを以て目的とす

とあり、院長清水氏の當學院創設の抱負信念を明確に示してゐるのである。

斯くて此の目的達成のため、本科及別科を置き、修業年限を一ケ年とし、學科課目を、修養講

座、心理學、人體學、衛生學、公民講座、體育研究、自彊術一般、及實演の八課目一週二十六時間間の授業としてゐる、卒業生は自彊術師と稱する事を得、社會的に體育、治療兩方面に活躍する道が開かれてゐる。

昭和四年當學院創設以來、すでに千二三百名の練習者を育て、同學院の功績見るべきものがあるのである、尙常に、自彊術實演體操實施治療法の講習會を開き、或は絶對無料にて毎日期六時より三十分、夕五時半より三十分體操を公開指導し、體力の測定、體勢の判定とその矯正等を無料にて引受け、又低廉なる料金にて、病氣治療を行ひ、煩める患者に全快の喜を與へ、又明日の日本國民建設のため兒童の發育と健康の監視と指導を引受けるなど、社會的に奉仕し、その業績を着々と擧げつつある。

今や都會人士の健康に對する關心は痛切に目覺めつゝある、これに先つて、此の如く、一般人の境遇、年齢、男女の別なく、何人も隨意に且容易に實行し得、自らあらゆる病氣を防ぎ自ら強健と長命を保ち得るこの術が、民衆化され次第に廣めらるゝに至つたと云ふ事實は、實に喜びに



堪へない次第であり、一に吾が清水氏の社會的奉仕事業の恩恵によるものである。

この術がその特徴とする、純日本式であると云ふ事實は、體格體質異なる洋式模倣の各種體育に對して、明なる反省材料を提供するものであることは注目すべきである、日本人の體質に合理的であり、而も自然の大理想に基くところに、この自強術の絶大なる價值が存する、理想的に言へば、各々個人々々異なる體質を有するのであるから、各々此等に適した自強術が行はねばならない、而してこの術は、その實演の方法、治療技術、何れも、そのやり方の適否に細心の注意を拂ひ合理的に自然の理法に基いて行ふもので、自ら用ひて身體を改造し、益々健康を増進し、又他人に治療すれば、その病體に忽ち活力を補給する作用を強めしめ、治療力を著しく高め、體質を一變さすものである。

初め治療法のみであつた自強術が、これを受けた多くの人、即ち體驗者並要求者の熱望が、更に自力實演の方法を産み出す動機となつて、こゝに體操が行はれるに至つたのも、當然の結果と言はなければならぬ。

で病氣のある者は、此の治療法によつて活力の源泉である血液の補給、運行の作用を強め、治療能力を増進し、自強術實演によつて、益々その効果を迅速確實ならしめ、一度健康體に復すれば、爾後引續きその實演によつて、全身の保健要件を整備し、之を保全することに努めねばならないことを極力すゝめてゐるのである。

扱て斯くて本學院の公開によつて、自強術體操の母體であり、源泉である、自強術治療法を併せ知るの道が開かれ、此處に完全なる術の全部を修得することを得べく、一般國民の健康生活向上の爲に非常なる便宜の與へられたことは、實に清水氏の社會に對する多大なる貢獻であると言はねばならない。

### 細心なるその實行要領の注意

かく合理的な此の術は、之を行ふ場合その要領及注意に綿密周到を極めてゐる。けだし如何なる運動も、その要領を誤る時は、効果が少いのみでなく、却つて有害なことさへあるためである

今その二三を紹介し、その自強術の内容を知る便がとしよう。

#### 機勢を利用すること

自強術は力を入れて行ふ體操ではないのである、ハツミを利用して、入れた力を直ちに弛め、その反動を用ひて動作を次から次へ續けて行く恰も、打ちつけた毬がハネ返るやうに反動を利用して行ふのださうである、入れた力をそのまま止める事は、却つて血行を滯らせることとして禁物としてゐるのである。

#### 標準を知ること

その各動作は、健康體の人ならば、必ず動くべき處までの程度を標準としてあつて、此の標準を知ることが重要なことゝされてゐる、標準を知らずに行ふ事は、定石を知らずに碁を打つと同じで、その向上は望めないと思ふのである。

#### 各動の正しい型に従ふこと

正しい型を強要することは當然の事と思はれる、型を崩して行ふ時は、運動の目的と反した部分

に力が入り、保健の目的達成は勿論得られないのみでなく、悪い結果さへ招來することがあるからである。

#### 動作は靜に行ひ急がぬこと

機勢を利用すると云へば急速に行ふことと誤解されやすいが、自強術はさうではない、急いで早く行ふ事は却つて疲勞を來し、血行を不平均にするものである、自然を重んずる自強術は各人の呼吸と脈膊に合わせて行ふことを尊んでゐる。

等の細密なる注意要領を示し、尙行ふ時の可否として、満腹の時を避けるとか、朝は身體が硬直してゐるから急激な屈曲動作などを用ふことは筋骨を傷ふものとして、離床後二十分位経つてから行ふべしとか、就寢前がいいとか、實演後直に入浴や冷水浴等をして血行を亂すことを戒めてゐる。

其他特に日常生活に於て疲勞や苦痛を調節する方法を示して居り、又自強術が嫌ふこととして冷水浴、冷水摩擦等、何れも身體を冷やすことは不可とし、身體を冷すために生ずる害は、皮膚

を鍛へる利益よりもモット／＼大きいものがあると言ふ、又温浴の如きも、長く浸つて不自然に温まることを戒しめて居り、腹に力を入れることも悪いとされてゐる是は内臓機關に壓迫を加へ心身活力の減退を來すがためである。

すべて此等は自然を尊重して、そして實驗的體驗を通して合理化されたもので、一つ／＼聞くべきものがあると思ふ。

### 健康體判斷法

その健康體判斷法にも、聞くべきものが多い、言ふところに依ると、此の人體は、生理的方面のみでなく、物理上、力學上、又精神上からも、悉く完全に調つた、正しい體勢を持つ事が保健上の要件であるとする、體の左右の力が著しく偏寄つて居たり、身體各部の屈伸が不足して居たりすると、種々の場合に必ず内臓や、神経血管へ、壓迫障害を起すと言ふのである、こゝからその健康判斷法は出發し、極めて實際的のものである、其の二三を示せば

仰臥の姿勢で胸の處まで膝を引きよせることが出来るか

仰臥したまゝの姿で頭から順次起き上れるか

直立してゐて左右交互に足を前に高く上げ一脚で平均に立つ事が出来るか、又之を横側に差出しては如何

下駄や靴の著しい片減りはないか

等々、健康體のものなれば成得る姿勢を以て測定する方法である、かくて仔細に調査したる結果正確な判定が下されるとする。

尙自彊術の治療法に於ては、腹を作ることを重ずる、かの慢性病が治らず、藥の效目の悪いのは、病氣の原因が何であつても、多くの内臓の働が悪いことに歸着するとし、内臓の働きは腹狀の正否に依つて常に左右されてゐる、腹狀が悪くなれば、結局内臓其の他悉くを悪化せしむる動機となると云ひ、治病能力を活躍せしむる爲には、如何なる部分よりも、先づ腹を完全に整へなくてはならないとするのである。

斯の如く自強術の治療法では、腹を整へることを最も重視してゐて、硬い腹、伸縮の悪い腹、石塊を包んだ様な腹、こんな腹を持つてゐては、薬を浴びる程用ひても、それは丁度コンクリートの上に蔭く種は、何年経つても芽を出さないと同じに、その病氣も治る筈はないと言つてゐる。伸び縮みのいゝ柔軟な腹を作れば、假令他に多少の故障があつても身體は自整されるとし、正しい腹は體勢に依つて保たれると言ひ、自強術の治療法は、正しい體勢と完全な腹を作る方法であるとさへ言つてゐる。

之等健康體判定法に説くところも、又治療法で説くところも、實に清水氏、その人を思はしめる所が多いのである。完全を望む理想主義な人格者としての氏が見える様であり、本質を掴み徹した考へ方をする氏の面影が見える様である。

氏は而してこの術を體驗し、健康を増進し、實に朗らかに、爽快な毎日を送ることを自省しての自強術普及に依る國民生活の安定、明快を衷心から希念されてゐるのである。

### 目的効力

その目的効力については、すでに繰返し述べた所であるが、尙一度簡単に此處に數へ上げてみよう。

兩者共に間接（大）と直接（個人）との二つに大別し得る。

直接個人目的としては、身體各部のあらゆる運動力を圓滑ならしめ、健康の増進を計るにある而して健全なる身體は、やがて健康なる精神を保持する、自強術修業中に思想的に緩和され健康となり、純正明快なる情緒の涵養ともなり、圓滿なる人格者となり得るのである。殊に青少年期に於ては實演三四ヶ月にして、殆んど性格的變化を示すとさへ言はれてゐる。

斯くて大目的へ一步を進め前述の如く國家的に失業の救済、思想國難の打開、犯罪防止の大事業ともなり得るのである。かくて清水氏窮極の目的たる國民生活の健全なる發達も期圖せらるゝのである。

扱其の直接效用は、三十一變の形式を通じ、動作が自由に樂々としなやかに行ひ得るに至ると各部各機關が自由に動くべき處まで動き、次いで内臓や神経血管を最大限度にまで活躍せしめ、全身の健康を自然に保つ所以となるのである、かくて病的の部分は自然に矯正され、内臓の位置は正しく、諸器官に對する壓迫障害は除去され、身体活力の高まるにつれ、食欲、便秘、睡眠、何れも不知不識に順調となり、身体の健康増進から、次第に性格の穩健、精神の爽快を齎らし、引ては健全なる國民として社會的活動を最善に營むを得、自己はもとより、一家の和樂、はては國家社會の安寧と隆盛を招來するものとするにある。

### 學院長清水釘吉氏

清廉純情の人格者、清水釘吉氏は、今や此の自彊術學院長として、その人格の發揮に努められつゝある、氏は、元大審院長法學博士横田秀雄氏を顧問とし、辯護士法學士 高木氏を理事とし清水氏の甥諏訪氏が幹事となり、益々學院の發展充實を計りつゝある、其の道場は勿論、體育方

面への施設と共に、徳性涵養方面への留意、情操陶冶への整理等、あまねく修養に資し、人格教育の實を擧ぐるが爲には、至らぬなき設備と教育が行はれつゝあるのである。その道場の如きにも立派なるピアノが据えられて居り、保健に對する書畫が飾られ、美と莊嚴と實際とを兼ねた立派なものである。

率先の人清水氏はこの道場に於て、自己は勿論、家族親戚の者一同と共に朝六時より修養に努め學生達に範を示すなど、信ずる所強い氏の人格の感化は深くそれらの人々に影響を與へつゝあるのである。

温厚篤實の士としての人格者清水氏が、清水合資會社社長として世に爲した事業も勿論大きい、がそれ以上に、思想混亂の現下日本のために、自彊術學院長として、氏の勵みつゝある事業も、亦社會に貢献するところ大なるものがあると言はねばならない。

今自彊術道場は全國に四つあり、東兩國の本部と、此の駿河臺學院、巢鴨の道場、及福島縣下に於けるそれとである。

ラヂオ体操、國民体操が普及しつある今日、健康増進に對する人々の自覺關心は日一日にその度を増しつゝある。

此の際純日本人の體質を規準とした、合理的健康法の普及を計られた氏の功績は偉大であり、やがて此の術の眞價が、マイクロホンを透してあまねく天下に知れ渡るの日も近き將來であらう又その結果が一日も早く實現し、明るき健康なる國民生活の營まれるに至ることこそ氏の深き希念であり、氏の學院創設の信念も實にこゝにあつたのである。

世界第二の大都市として、世界に誇る東京市民が、その物質文化の進展に遅れざる、健康健實なる文化生活の實現こそ、我々の勵むべき重大事なくてはならない。オリンピック大會に於て幸に世界に稱へるに至つた水上競技跳躍等の如きもやがては、この自強術普及の曉には我日本の運動競技に亦一段の跳躍を見せることにならう、思ふだに日本將來の健康生活は吾人の爽快を感ずる所である、幸に清水氏の今後のよりよき奮闘盡力と國民一般の熱誠なる理解協力とを翹望して止まぬ次第である。

### 清水一雄氏を語る

第一高等學校より帝國大學法學部に進んだと聞いただけで、氏が明晰なる頭腦の持主であることはすでに讀者の想像されることであらう。かゝる法學士としての氏が、清水組にある事は、業務經營の上に、事業進行の上に、如何に好都合であり、重要であり、従つて氏が如何にその手腕を振ひつゝあるかについても今更言を要しない。

氏も亦、義兄釘吉氏と同型の着實温厚の人であり、繰返して言ふのが繁雜を感ずる程、釘吉氏に似た、思想、趣味、人格の持主である。

二人共、互に相扶け各々自己の得意とするところにより清水組の繁榮の爲献身的努力をつゞけつゝある事はすでに述べた所である。實に清水組は着實なる此等二人の協力に依つていよく一家事業の發展を示し、當時の同業者、大林組、竹田組、安東組、鹿島組それに戸田組、藤井組石井組、戸樫組、錢高組等の錚々たるものゝ中に伍して、絶對的に他を壓し、堂々斯界第一着た費

るに耻じぬ業績を挙げたのである。

扱清水釘吉氏が、餘り社交的な方面を好まなかつた様に、一雄氏も又さうした方面を好まない然し斯くては同業者間との交渉から對社會的事業方面の外交にどちらかと言へば支障を來たし易く、その方面に不足である、清水組に是非なくてはならないものは此の方面を代表する人でなくてはならない。而してそこに幸にも三女トク子氏の夫君、揚之助氏を得たのである、氏を得た事は實に清水組鼎の一脚を得たに等しく、斯くて各部を代表する人士を得て、大清水組の完全なる全的活動は絶大な進展を示したのである、清水組の如く適材を適所に得、而もそれが全部利害を等しくする兄弟によつて組織され、整つたる陣容を以て事業に臨み得ることは、他の如何なる會社にも見る能はざる所で、此處に清水組最大發展の原因を認むるのである。

### 清水揚之助氏を語る

揚之助氏は慶應出の明るい性格の保持者である、一度氏に接した者は、その朗らかさに知らず識

らず同化させられるとさへ言はれる。

氏は實に多藝多趣味の人、社交の人、天才的に清水組の一部を代表すべく生れて來た人とさへ言ひ得る、宴會等をすら避け勝ちである義兄二人に代つて、あらゆる外交を一手に引受けての目覺ましい活動は、實に義兄二人の功績に決して劣るものではない。否氏の活動あつてこそ、清水組の花やかなる活動があるとさへ言ひ得る様に思ふ。

氏の場合には、それら多藝多趣味が、何物にも勝る社交の武器の役として利用されてゐるものである、その繁雜なる外交を、明るく容易に進展せしめ、所期の目的達成に、重要な役割を果してゐるのである。

勿論この間には常人以上の努力と困難と苦心が拂はれてゐる事を忘れてはならない、活社會の渦巻く競争裡にあつて、大清水組を背負つて、此等外交に當る責任は重大であると言はねばならない、而も先天的天才的にその方面に勝れた氏は、一見容易に快活に樂々とすべてを處理されつゝある觀がある、一に透徹した頭腦才略と敏腕とが致さしめるところであらう。

扱着實とか堅實とかの型でない氏ではあるが、それかと云つて世に見る、遊興に日を送つたり家庭的に規律の無い生活をする類の人でない事も又明な事實である、それらルーズな生活者、私欲に溺れるが如き人では、決して大外交に當ることが出来ない。

氏の底には動かすべからざる規範を藏してゐる、その多藝多趣味は氏の人格を助成しその人格に光輝と香を添へるものではあれ、決して之を傷ねるものではない。こゝに常人と異つた氏の偉大さがある。

従つて宴會に臨み、外交のため出入する場所が、或は酒色に溺れ、常規を逸し、家庭的不和等の原因をも助成し易いのであるが、氏の其等凡ては手段であり、決して目的と間違ふ等の事は無い、常に第一目的を底に藏し、事業を外にして遊興に己を忘るるが如き曖昧なる事無く、其の實際の爲にする酒も量を過すが如き事なく、絶対に何處までも明るく凡ての場合に處する其の交際術は、實に近代的色彩を放ち、精練されたものである。

家庭に於ける夫人との愛情の如きも人一倍蜜なるものがあり、明るい濃かなる愛情に包まれた

る家庭の空氣は、實に好もしいものである、又夫人のこの理解と愛情あつてこそ、揚之助氏も明るく、其の難局に當り、よく今日の業績を擧げつゝあるのである。

### 三氏揃つての清水組の活躍

斯の如く、各々その特長を有し、事業の三大分野に各々適材を得、互に和親協力事に當る一家の繁榮の目ざましいものあるは當然の結果と言はねばならない。

今や洋式建築益々増加の形成を加へつゝあり、將來清水組の繁榮も亦火を見るより明らかな事實である。

洋式建築は釘吉氏社長就任時代には、まだ木骨建であつたさうであるが、それが次第に練瓦建築となり、今や鐵骨鐵筋コンクリート全盛の状態にある、かくて益々大建築が現れ之に従事する清水組の太り方も顯著なものであり、震災後は建築様式も鐵骨鐵筋コンクリートへと轉向した業界の一大劃期を見た、更に建築の機械化も震災後は非常な發展を遂げたのであるが、清水組は常



に斯界の模範として常に指導の地位にあつたのである、その請負高も年々に増加し、現在では二十年前に比すれば優に数十倍以上に及んでゐる有様である。

清水組搖籃の地は實に横濱市中區野毛町であるが百三十年以前を懐古し、現在を思へば日本文化の變遷の著しきものと共にこの建築界に於ても思ひ半ばに過ぎぬものがある。

現在清水組は本社を京橋區寶町に堂々と構へ斯界への貢獻をなしつゝあるのであるが震災には寶町の店を焼失せしめ一時京橋の實業ビルを借り受け、十五年夏丸ビルに移り、後現在の處に居を構へたのであつた。

今や市政擴張され、世界第二の大東京市整備のためには、如上の歴史と如上の陣容を有する清水組の活躍をまつ所も非常に多いわけであり、堅牢第一主義の清水組の建築がいよゝゝ世に迎へられつゝある事も着實堅實をモットとして進んだ清水組に對する當然の報とも言ふべきものであり今後の活躍は益々目ざましいものある事を信ずるものである。

更に氏が社會奉仕として創設した自強術學院の發展を國家の爲に希つて止まないものである。

### 清水組と 清水釘吉氏の自強術

昭和七年十一月二十八日印刷  
昭和七年十二月三日發行

【非賣品】

著者 日統社編

發行者 中村一市

東京市芝區西久保巴町十七番地

印刷所 日統社印刷部

東京市芝區西久保巴町十七番地

印刷者 荒川富次郎

不許  
複製

東京市芝區西久保巴町四十六番地

發行所 日統社

電話 4312594番

中村一一著

四六判洋裝假製  
紙數二百五十餘頁

近刊

# 大和魂の本體

現在歐洲の識者、思想家等の間に於て、東洋文化に對する禮讚、渴仰の聲と共に、世界無比なる我大和魂の研究熱が擡頭して來た。然らば大和魂とは何か？ 即ち日本國民的意識であつて、そこに政治あり、經濟あり、宗教がある。本書は日本國民思想の根本的標準たる、大和魂の検討であり、考察である。

中村一一著

## 日本主義的一考察

附 玉塚氏の天保錢主義

科學文化の進展に伴れて、極度に理論偏重、物質萬能となつた現代生活に對しての日本主義的一考察と明治時代の自我、功利擡頭に對して、道義的精神を強調した天保錢主義

中 村 一 一 著

## 服部金太郎氏の横顔

リットン報告  
書の支那認識

一、我國時計工業の發展と服部氏、二、彼の個性に顯れた正直と正確、三、彼は財界唯一の人格者、四、政治家と肌の合はぬ彼、五、服部報公會を設立した彼。

## 小布施新三郎小傳

愛國の士

小布施氏が、愛國の至誠の爲め、飛行機獻納に三十一万圓を出された事は、我國最初であり其後續々愛國號の獻納となつた。即ち先覺者小布施氏の小傳。

## 水原嘉兵衛小傳

奮闘の人

水原氏は、克己、忍耐、の權化である、その切瑛琢磨の辛勞は活ける模範の典型である。又謙讓な人格者として知られた菓子舗『清月』主の奮闘傳

## 日本主義的動向

附

東京府農工銀行支配人  
杉本正幸氏の信仰生活

國難打開の爲めに國民の血潮から喚起された、大和民族精神の動向と一信念の人たる杉本正幸氏の尊い生活體驗の一觀察

御申越次第無料  
郵送致しませ

日統社發行

東京市芝區西久  
保巴町四十六番地

御申越次第無料  
郵送致しませ

日統社發行

東京市芝區西久  
保巴町四十六番地

刊近

ヤマサ醬油  
の沿革と

濱口儀兵衛氏

既

老舗越竹  
の沿革と

高橋竹藏氏

成功の要素として運、鈍、根と云ふ、その上に才を有つた高橋氏の苦闘傳

刊

國家中心主義と澁谷正吉氏

澁谷正吉氏は現下實業界に飛躍する好個の紳士であると同時に、皇室中心主義を高唱し、併せて刻下の行き結まれる經濟界を打開發展に努力せる隠れた國士的存在である。彼の過去の奮闘は、よく懦夫をして起たしめるものである。即ち好個の記録

錦秋高等女學校長 秋間爲子女史の足跡

國民精神の緊張と、堅實なる國家の充實發展を期さうとするには、我國傳統の敬神崇祖を養ひ、道徳的情操の徹底を斗らなければならぬ。秋間女史は敬神、崇祖、婦徳涵養、勤儉質素にその全靈を捧げた人である。然も自ら實踐躬行された足跡である

東京市芝區西久  
保町四十六番地

日統社發行

料無次第越申  
送致します

終

日  
統  
社  
刊  
行